

二〇一六年度国文学会彙報

二〇一六年度国文学会活動状況

△「新入生歓迎会」 学生会主催

二〇一六年四月五日 新島会館

△国文学会総会・研究発表会・伝統芸能成果発表会▽

二〇一六年六月二日 寧靜館五階会議室

・総会

・研究発表会

『宇治拾遺物語』孤立話の素材加工

—— 第三話「金峯山薄打事」考 ——

本学大学院博士課程前期課程 村上泰規

椎名麟三作「約束」を読む／視る 本学准教授 瀬崎圭二

・伝統芸能成果発表会

仕舞（能）「羽衣」 本学学部生 大槻裕一（赤松裕一）

日本舞踊「長唄 新曲浦島」

本学学部生 飛鳥梅之介（獅野勇貴）

△国文学会研究発表会・講演会▽

二〇一六年二月四日 良心館三階三〇五教室

・研究発表会

「桐」の表現

—— 『源氏物語』における「桐壺」 ——

本学大学院博士課程前期課程 丹羽雄一

『宇治拾遺物語』における仏教話型

—— その受容と変質 ——

本学大学院博士課程前期課程 嶋中佳輝

小説教材『走れメロス』の授業実践

同志社女子中学・高等学校教諭 相井美保

・講演会 同志社大学文化学会共催

歴史小説の構造

—— 「虚構」と「史実」の間 ——

小説家 澤田瞳子

△国文遊歩▽ 学生会主催

第一回 二〇一六年七月三日

岩寺付近

第二回 二〇一六年十一月六日

三井寺付近

第三回 二〇一七年二月五日

有斐斎弘道館 茶室体験

△国文合宿▽ 学生会主催

二〇一六年八月二五・二六日

同志社びわこリトリートセンター

△講演会△ 院生部会主催

二〇一六年一月五日 弘風館四階四一番教室

日本小説史における十九世紀

高木 元

△ゼミ相談会△ 学生部会主催

二〇一六年二月八日 徳照館四階

△国文合宿△ 院生部会主催

二〇一七年三月九・一〇日 吉野・飛鳥付近

△同志社国文学△

第八五号 二〇一六年二月二〇日発行

収載論文九篇、資料紹介二編

第八六号 二〇一七年三月二〇日発行

収載論文五篇、資料紹介一編

△国文学会会報△

第四四号 二〇一七年三月二〇日発行

二〇一六年度修士論文題目

「不思議」と「怪異」からみる『太平記』の構想と破綻

橋谷真広

〈偶然〉と〈晩年〉のさなかで

——花田清輝「狐草紙」「みみずく大名」の歴史観——

加藤 大生

永井荷風の作品における「江戸演劇」の要素について

——明治末年から大正初期における演劇界との関わりから——

北井 達也

中世文学における孝思想

——物語と伝典との交渉に関する考察——

小森 一輝

北杜夫作品に見られる人間認識について

——「夜と霧の隅で」・「楡家の人びと」を中心に資料比較を通じて——

松田 望

大正期谷崎潤一郎の肉体表象

——中性美を中心に——

松本 匡由

宇治拾遺物語の表現と意味解釈

中古複合動詞の助詞介在から見る「複合動詞の成熟度」について

村上 泰規

『今昔物語集』天狗説話の話型と構成

草双紙における演劇素材の利用方法

島田 薫

嶋中 佳輝

大杉 里奈

二〇一六年度卒業論文題目

『古事記』七番歌について

村上 天晴

『古事記』における「建御雷神」と『日本書紀』における「武甕槌神」

吉原 菜穂

——漢字表記の相違から——

日本神話における対立構造

後藤 絢

——『日本書紀』を中心に——

『万葉集』巻二・九三歌

森田 将文

——「覆」の訓について——

『万葉集』巻七・一〇六八番歌における比喩および「傍・傍・傍」の使い分け

松重 ほなみ

『万葉集』巻七・一一六九番歌「草結び」および「けむ」の解釈について

山本 正樹

「把乱」考

米奥 彩乃

——『万葉集』巻一九・四一四三歌——

『万葉集』における「榛」の訓について

三嶋 良平

——「ハリ」か「ハキ」か——

『懐風藻』一二番詩について

武蔵 隼斗

『落窪物語』におけるあこぎの働き

松尾 友香

『落窪物語』における「いじめ」とは何か

松田 賢太郎

『枕草子』の季節観

——「春はあけぼの」の段を中心に——

中塚 綾乃

『枕草子』における人物賛美からみる清少納言の人物観

笹山 はるか

『枕草子』清少納言の感性の独自性

池松 駿

『虫めづる姫君』の特異な人物像の意義

高島 彩音

——姫君の言動を手掛かりにして——

『虫めづる姫君』の虫めづる意味

中村 流星

藤壺からみる、光源氏との関係

池ヶ谷 夕音

紫の上の嫉妬の意味

岡本 早貴

『源氏物語』桜と紅梅による紫の上の人物造型

他者とのかわりから見る六条御息所の人物像について

高山 文奈

山中 りさ子

『源氏物語』における明石の君の役割

「胡蝶」巻における柏木の懸想文

阪口 美帆

——和歌表現「岩漏る」を中心に——

色彩からみる玉鬘の性質

香ノ木 麻由

特徴的な語からみる雲井雁の人物像

——「うつくし」と「らうたし」・

「耳はさみ」・「ひききりなり」——

『源氏物語』からみる女性評価について

四人の登場人物から見る『源氏物語』での教育

『源氏物語』における服色の表現

——風景描写との関連性——

帥宮挽歌群における和泉式部の悲しみの表現

『紫式部日記』からみる紫式部の人物像

物語に捧げた人生

——菅原孝標女の人生において物語が持つ意味——

『讀岐典侍日記』における帝の存在

——臨終の場面の叙述をめぐって——

歴史物語としての『大鏡』

——語り手からみる『大鏡』——

『今昔物語集』巻一四における転生譚の特性

——『大日本国法華験記』との比較を足がかりとして——

今村雄一

『とりかへばや物語』における「性」

——物語のキーパーソンとしての中將——

『とりかへばや物語』における親の特徴

『宇治拾遺物語』第一七一話考

『伴大納言の事』の説話としての魅力

——『宇治拾遺物語』における伴大納言説話——

中世の笛説話

——笛の役割に焦点を当てて——

藤原俊成の釈教歌

——『長秋詠藻』と『千載和歌集』を中心に——

中世和歌における歌語「白波」の考察

『平家物語』における死の在り方

『平家物語』のだまし討ち

『平家物語』における死生観

『平家物語』屋代本剣巻の性格

『太平記』における女性

柴田青葉

尾崎侑子

野田真帆

岩田輝美

中山美月

岸 さゆり

安藤有希

川崎聡一郎

宮本真由

西出稔

茅野桃華

吉峯理茉

『太平記』の夢の効果

——『宇治拾遺物語』『平家物語』と比較して——

山川 奈々

謡曲《松浦》にみられる佐用姫伝説の受容

岩佐 誠太

世阿弥能考

小川 直子

——《松風》《井筒》《砧》——

《隅田川》小考

山本 愛奈

——元雅のあはれ——

御伽草子異類合戦物の物語構成

花木 彩

諸本の比較からみえる古法眼本『酒伝童子絵巻』の独自性

山口 瑞貴

『鉢かづき』における姫君の変身

白田 麻里子

——姫君の処遇の変化を通して——

『鉢かづき』『愛』から探る物語の主軸

永原 佑樹

『猫の草子』における動物の描かれ方

高木 稜子

——他の「御伽草子」作品と比較して——

御伽草子「浦島太郎」の誕生

行壽 彩香

——神仙説話からの変容——

浦島説話における亀の神性について

辰井 宏城

師弟俳風論

——芭蕉と其角——

稲尾 佳衣

武家屋敷における芸能の受容性

——『松平大和守日記』を中心として——

福沢 奈津実

『古今百物語評判』の評判性

村山 聖咲

『好色五人女』におけるお七の特性

山崎 翔平

夕霧像の多様性とその変化の再考

——夕霧追善劇から読み解く——

吉田 祥子

近松が描く俊寛像について

白澤 尚子

巴からみる『女暫』

——その魅力と位置づけについて——

井元 雅子

『義経千本桜』渡海屋の段における古典作品の利用

安川 絢菜

『在京日記』に見る官長と孟明の友情

下林 真梨子

『草双紙年代記』と『稗史億説年代記』

坂上 佳蓮

『南総里見八犬伝』の作中における船虫の悪女性とは

——玉梓との類似点からみる八犬伝の悪女——

木村 友香

『春色梅見誉美』にみられる女性像

佐藤 真也

十返舎一九の『化皮太鼓伝』における笑いについて

村上 佑太

『祇園ねりもの』にみる京都の花街と芸能の関わり

坂口 康佑

歌舞伎衣装の展開

——役者の意匠と浮世絵の資料性について——

堀部 李香

『獅子物』の変遷からみる『鏡獅子』

上遠野 正美

『義血侠血』における滝の白糸の情

國 近 瑠

島崎藤村『旧主人』における小諸とその周辺の風土

掛川 宏貴

『吾輩は猫である』と『道草』からみる

柳 原 嗟 千

夏目漱石の子どもの役割の変化

小池 香菜

夏目漱石『一夜』論

牧野 桃子

谷崎潤一郎『秘密』

三好 雅

——『秘密』を形作る要素——

女性崇拜からみる『痴人の愛』

大垣 真己

『猫と庄造と二人のをんな』における

『口ぶえ』考	——青年期の折口信夫の宗教的価値観——	廣田 遼平
『一房の葡萄』に見られる愛について	再考『赤い蠟燭と人魚』	森 瑶子
——そのモデルと結末——	永井荷風『雨瀟瀟』の本質	濱野 慎也
——描写表現やことばを中心にして——	『人でなしの恋』論	平井 亜実
——京子の「語り」を中心に——	同性愛を描く	新居 依里子
——江戸川乱歩『孤島の鬼』論——	『或阿呆の一生』でみられる西洋文化の考察	張 姝青
宮沢賢治『よだかの星』について	梶井基次郎『のんきな患者』における	全 修娟
〈死〉と〈詳細な描写〉	夢野久作『死後の恋』にみる語りの妄想性	齊藤 瑞希
『骸骨の黒穂』における夢野久作の乞食への意識	夢野久作『少女地獄』論	小澤 拓也
——少女にとつての「地獄」——		木村 美希
		西尾 英悟
		塩田 明子

太宰治『ダス・ゲマイネ』

—— 卑俗な自己を見つめる眼——

大西 拓輝

『女生徒』論

—— 太宰のオリジナリティと「女生徒」像——

鹿毛 歩美

太宰治『きりぎりす』論

—— (エゴチズム) の検討——

赤井 千紘

『風の便り』からみる太宰治の文学観

太宰治『清貧譚』における新体制

杉山 早紀

太宰治『正義と微笑』論

—— ロマンチストからリアリストへの変貌——

田井中 美咲

中島敦『わが西遊記』における人物拡張と沙悟浄のまなざし

出口 京香

三島由紀夫『怪物』について

—— 松平齊茂の考察と「華族」の作品への関わり——

河野 國泰

田宮虎彦『鹿ヶ谷』論

—— 「家」制度を基に疑似家族の崩壊を見る——

古川 聖也

星新一がいかにして自身をショートショート

の形に仕上げたか

五十嵐 将貴

吉村昭『少女架刑』の主題

年代設定から紐解く『夏の光』

陶山 光

—— 忘れてはならない在満日本人の未来と悪の根源——

兼重 文

『1973年のピンボール』論

—— 『IQ84』との比較を通して——

井崎 隆登

村上春樹『納屋を焼く』をめぐって

村上春樹短編作品『めくらやなぎと眠る女』

『めくらやなぎと、眠る女』改稿研究

塩田 樹里

村上春樹『眠り』における女性表象

『ジョゼと虎と魚たち』における女性障害者の描かれ方

『少女の器』論

—— 「女」への成長について——

池澤夏樹『ステイル・ライフ』論

—— 冒頭節の意義——

西村 彩花

桐山作品における「リトゥル・ペク」の位置づけ

濱道 柚璃

「藍」における女性の生活とその効果

山下 茜

指示詞「コ・ソ・ア」の用法について

——詩の用法を中心に——

堀 祐貴

「予想・期待と反する結果」を表す副詞の

史的変遷と意味分析

谷 井 朝 美

非外来語のカタカナ表記

——各メディアにおける使用傾向の比較——

——「なかなか(に)」「なまじ(っか)」「むしろ」「かえって」について——

「幼い」を表す形容詞の通時的研究について

錦 戸 君 枝

現代新聞における語種別の略語の特徴

「本」に関する語の通時的な研究

木 村 彩 乃

新聞記事における外来語の変遷

「はな」を含む和歌の語彙調査

椿 風 香

——二〇〇〇年から二〇一五年までの

古典随筆作品の文体比較

小 玉 拓 人

一面記事を資料として——

——計量語彙の観点から——

中原中也の詩の文体

堤 七 奈

翻訳作品にみられる役割語

高校教科書の教科・科目間における文体比較

北 田 惇

——韓国漫画の日本語翻訳を中心に——

「独り言」の形をとる談話

藤 田 一 慧

日本語のホスピタリティ

——日本語話者の談話における配慮表現——

大 原 里 菜

明治期から昭和期の作家の当て字

興 津 ちなつ

宮沢賢治のオノマトペ

——小川未明・新美南吉・鈴木三重吉との比較——

佐々木 真 理

坂 井 薫

保 浦 育 美

根 岸 実 可 子

朴 基 完